

うたとかたりの対人援助学

第33回「子守唄・わらべうた学会 2025 夏の学校」

鵜野 祐介

はじめに

2022年9月に発足を開催し、2024年より本格始動した子守唄・わらべうた学会では、今年（2025年）8月2日（土）・3日（日）の1泊2日にわたって、夏の学校を開催した。会場は群馬県下仁田町旧西牧小学校跡地の女性村ねぎぼうず、子守唄・わらべうた学会会員や本学会に関心をお持ちの方、20数名が参加された。私も同学会の代表として前日から3日間現地で過ごしたが、本稿ではこのイベントについて、参加者の感想も交えながら総括的に振り返り、今後へとつなげていきたいと思う。



- ・基調報告「子守唄・わらべうた学会の目指すもの」
鵜野祐介
- ・講話「日本子守唄協会と女性村ねぎぼうずの取り組み」
西館好子

15時15分～16時：休憩

- ・「フジコ・ヘミングさんのピアノを聴く」横谷和子



16時～17時：講演

- ・「日本の音楽とわらべうたの歴史的変遷」尾原昭夫



プログラム

▷8月2日（土）

13時30分～15時15分：オー

プニング・セッション

- ・「開校の挨拶」鵜野祐介
- ・参加者全員の自己紹介



17時～17時30分：

自由見学

松永伍一、鶴見和子など館内各部屋の参観

17時30分：下仁田館へ移動

19時～20時30分：夕食、懇親会



・講演「群馬は童謡の宝庫」須賀正二

▷8月3日（日）

9時～12時：研究発表、実践報告、講演

- ・研究発表「ベトナムの子守唄から見る自然観 タイ族の初期儀礼子守唄にあるアニミズム世界観」
TRAN THI NGOC QUY



12時：閉校の挨拶 鶴野祐介

参加者の感想

イベント終了後、参加された方がたから自由回答で感想をお送りいただいた。その中からいくつかご紹介しておく。

- ・実践報告1「わたしのこもりうた 《DA/LEDA メソッド》の展開」鈴木久仁子

▷全体的な感想

・2日間を通して、私は「だれもが、日常生活の中で、食べることが当たり前のように、うたを（子守唄を）唄うことが当たり前になる」ことを夢に見ているのだとあらためて自覚することができました。だれもが自分の声で日常のなかでうたを（子守唄を）うたう、そのためにできることを楽しみながら取り組んでいこうと思います。



- ・実践報告2「子守唄・わらべうた—小さな人形を使って—」尾崎ふみこ

・全体から、主催者の方々が「子守唄・わらべうた学会」が何を目的として何を目指しているのか、その事を伝えようとし、一緒に考えることを願っていらっしゃることが感じられました。と、同時になかなか伝わらず、共有できずにいる難しさを感じまし

た。色々あっていいのだと思いますが、1日目にもお話しにありましたし、また、2日目でもお話しがあったように思いますが、混沌とした不消化の部分をかかえたまま過ごした感じがします。時間が足りないということがあるかもしれないですね。これからも伝え続け一緒に考えていく場を作っていただきたいと思っています。私も考え、取り組み続けていきたいと思っています。

・時間をかけて企画されたすばらしい会、私のような者にも門戸を開いていただき、学会主催の学びに思い切って参加してよかったです。私は「おはなし」ボランティアから「わらべうた」にたどり着きました。わらべうたをどの視点でとらえたらよいのか、文化人類学、音楽、文学、教育、保育、子育て支援、自分はどの立場なのか、迷うことが多々ありました。今回いろいろな立場でわらべうたを研究、実践されている方を知ることができました。尾原先生にお会いすることができ、心より感謝申し上げます。

▷会場について…懐かしさを感じる校舎と教室、下仁田の山々とまわりの自然から伝わる様々な要素が絡み合って今思い出しても鮮やかです。夏の学校の目的の一つである一人一人が感じる事、閉校の時の鶴野さんのお話にもあった五感を開き、感じることを大切にしたいとお話を考えたとき、この会場は本当によかったと思います。

▷研究発表について…最近の育児心理学において、世界的に胎児が母の胎内で、すでに音を、声を、歌を、音楽を聴いて成長しつつあるということ、それが出産後の成長・発達にも関わるとい実証研究が進んでいるなかで、タイ族でははるか昔から胎児に月毎に聴かせる子守唄があり実践されてきたという報告に大きな衝撃を受けた。

▷「群馬は童謡の宝庫」について…<子宝まんなか社会>の構築の主張に同感。『ぐんまの童謡』受贈に感謝。

▷その他

・宿での懇談会など、参加者全員の自由トークを重

んじ、もう少し時間を取りたい。

・希望者に、ジオパーク・荒船風穴そのほか、下仁田の自然環境、地質学的歴史の実地見学もあればよい。

・「女性村ねぎぼうず」の資料、内容を生かした講座（例えば 子守唄・松永伍一の資料を生かした講座）があるとよい。

・自己紹介に個々の活動や研究内容を加えたらどうか？ またはテーマに沿った座談会など。

・懇親会（夕食）はテーブル三つ（6・7人）位のグループに分けて、それぞれのグループに講師スタッフが入っておはなしが出来るよよかった（最後にそれぞれのグループ報告）。

運営面での課題

今回の「夏の学校」で実質的な実行委員長を務めていただいた落合美知子さんからのご報告を要約して紹介する。

▷夏の学校を開催する体制

西館さん、佐久間さんには、たくさん前準備をしていただいたが、会場を担当した私や受付・集金係が周知していないことが、多々あった。準備段階で役割、担当を決めておくとよい。

▷移動手段

下仁田駅から会場までの移動手段は、個々するにはお金がかかり過ぎた（タクシー代は4000円前後）。バスでは200円。70代からは無料。でも本数はあまりないので、バスの時刻に合わせた開始のスケジュールにする必要があった。タクシーの手配をする係も必要だった。今回は11人が同じ（落合氏の主催する）会員のために自動車で来た2人に協力してもらい、手分けして乗った。

▷宿泊の申し込み

宿の申し込みはまとめてする必要がある。今回、西館さんに20人の事前予約をしていただき、個々

に申し込むようにしたが、下仁田館では一人一人の申し込みに対応するシステムがないため個別のTEL予約は無理だった。参加申し込みの時に宿泊を確認しておき、宿泊者名と性別をまとめてfaxで報告する必要があった。

▷担当者からの要望

受付・会計担当が気づいたことは、参加者には簡単な名札（貼り付けるものでよい）があったらよかった。参加者の名簿（名前と簡単な紹介入り）が欲しかった。また、「子守唄・わらべた学会」の領収書が必要だった（今回は西館さんからいただく）。

おわりに

今回の「夏の学校」は、2014年8月に参加した「第8回みやぎ民話の学校」（宮城県丸森町）から着想された。全国各地から集まった200名を超える参加者の一人として、1泊2日で講演・シンポジウム、分科会に分かれての民話語り、夜の交流会、3・11震災遺構見学ツアーなどの全プログラムを堪能し、「民話」の代わりに「子守唄・わらべた」をコンセプトとした集いの場を、いつか設けることができないだろうか、と考えていた。

会場として、NPO法人日本子守唄協会の理事長であり本学会の理事でもある西館好子さんが、数年前に立ち上げて面白い企画を次々と展開させている群馬県下仁田町の「女性村ねぎぼうず」がいいのでは、と思いついた。そこで西館さんにこの企画を持ち掛けて、賛同を得たのは今年2月のこと。

そこから開校当日までのわずかな期間を、西館さんと一緒に準備を進めて下さったのは、埼玉県川口市で「ちいさいおうち」を主宰する落合美知子さんとそこに集う方々だった。さらに、本学会事務局の佐久間憲一さんや西館さんのパートナー・岩倉栄一さんにもご尽力いただいて、こうして「夏の学校」が実現できた。参加された全ての皆様にも心からの謝意を表したい。「イヤイライケレ(ありがとう)！」

私自身、今回はじめて群馬県を訪れて、いろいろな発見があった。断層に隆起する山並み、屹立する深緑の樹林、空の色の鮮やかな青、強烈な陽光、大

音量の蝉時雨、限りなく透明な清流、水面の上を渡るアカネトンボの群れ……、日本や世界の子守唄やわらべたの起源や歴史、現状と未来について、共に学び、語らい、歌うのに相応しい場所だった。

尾原先生のご講演は、子守唄やわらべたの音楽学的な特徴を日本の音楽史に位置付けて解説するものだったが、合唱や篠笛演奏も交えつつ、高度な内容をとても分かりやすくお話された。今回は主に中世（室町期）までだったので、近世以降となるであろう次回のご講演を今から楽しみにしている。

フジコ・ヘミング寄贈の「気難しそうな声」を奏でるピアノをあやすように弾かれた横谷さん、産育儀礼にまつわる興味深いベトナム・タイ族の伝承子守唄を紹介されたクイーさん、世界にたった一つの「わたしのこもりうた」を作ろうと呼びかけてきた鈴木さん、子守唄やわらべたを子どもたちに届けるためのツールとして人形を使った実践をおこなってきた尾崎さん、群馬ゆかりの童謡作家たちの紹介を通して「子宝まんなか社会」の実現を説いた須賀さん、いずれも大変興味深く拝聴した。

来年（2026年）5月下旬、同じ会場で次回の開催を計画している。今回と同様、「参加して良かったね！」と皆が笑顔になれるような「学校」となることを願いつつ。

